＜スタッフ紹介＞

役　　職	スタッフ名
主査（臨床検査技師）	中井　信子
スタッフ（臨床検査技師）	4 名
事務員	1 名

＜特色と概要＞

病理検査の業務は、組織診、細胞診に大別される。病変の一部を採取する生検組織診、手術によって摘出された標本の組織型の診断、病変の広がり、転移の有無、術中の切除断端の評価を行う術中迅速組織検査や、病理解剖からなっている。病理医による、最終診断（確定診断）を行うため、病理診断は、診療において重要な役割を果たしている。

大阪府がん診療拠点病院として悪性腫瘍の症例が多く、コンパニオン診断（免疫組織化学染色や外注検査）の件数が年々増加している。そのため検体DNAの良好な保存状態が重要である。病理標本の適切な管理と適切な標本の選択、質の高い標本作製が求められるため、さらに病理技術向上に努めていく。

今年度の構成員は、臨床検査技師5名（うち細胞検査士4名）事務員1名、計6名で業務を行っている。

＜実績＞

今年度は、前年度に比べ、組織診断検査の件数は、横ばいであった。術中迅速検査（組織診、細胞診）は250件を超え、前年度を上回った。OSNA（直接遺伝子増幅）法によるリンパ節転移検査は、前年度に比べ横ばいである。細胞診検査は、微増した。病理解剖は、各診療科のご協力により、15件実施した。病理解剖症例を対象とした、CPC（臨床病理検討会）は、年8回開催している。定期的に行われている（乳腺カンファレンス）に組織像を提示し参加している。

2023年度月別病理検査件数（入院・外来）

検査別＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
組織診	366	376	382	340	366	349	374	365	374	348	347	320	4,307
術中迅速組織診	16	14	16	14	17	11	14	19	17	12	17	9	176
診断のみ（借用標本）	3	1	3	0	4	0	3	3	7	4	1	3	32
OSNA法	2	14	4	5	4	1	9	4	3	1	0	2	49
迅速診段（OSNA法）	3	4	3	3	3	4	7	5	5	3	2	1	43
セルブッロク法	2	0	2	2	2	0	0	2	0	0	0	0	10
細胞診（婦人科材料）	172	194	256	167	172	187	278	212	155	132	142	178	2,245
細胞診（その他材料）	189	180	198	143	193	168	182	183	188	174	168	181	2,147
術中迅速細胞診	8	12	6	4	14	9	2	9	8	4	8	4	88
病理解剖	2	1	0	0	2	2	3	2	1	0	0	2	15

＜今年度の反省と来年度への抱負＞

組織診件数は年間4,000件、術中迅速診断は200件を超えていることは、高度な医療が実践されていると考える。病理解剖については、15件実施した。今年度は、目標の10件を達成した。また、遺伝子増幅検出装置RD-200が更新された。処理能力が向上し、測定時間が短縮、最大同時測定検体数は4→14検体に増え、検査結果時間の短縮を可能にした。

細胞診において、従来法に比べ、精度が高く、標本作製の標準化、不適正検体の減少や検査時間の短縮が期待され、標本作製の標準化として普及が進む、液状化細胞診（Liquid Based Cytology：LBC）による検査業務の拡充を図るため、機器導入を要望している。人材の育成、技術向上を目指す。

＜認定検査士＞

細胞検査士：4名（国際細胞検査士：1名）
遺伝子分析科学認定士（初級）：1名
臨床病理同学院　二級臨床病理技術士（病理）：2名
特定化学物質・四アルキル鉛等作業主任：3名